

# 連合研究科共同研究プロジェクト研究成果報告書

プロジェクトの 名称	健康と適応を守る学校予防教育の国際比較研究 — 独自性と共通性の探求から、新たな発展への模索 —		
研究期間	平成22年 4月 1日～平成25年 3月31日	プロジェクト記号	L
チーム構成員の氏名・職名等・所属（配属）大学 （◎：チームリーダー）			
◎ 山崎 勝之（教授・鳴門教育大学）	井上 和臣（教授・鳴門教育大学 H24.3 退職）		
安藤 美華代（准教授・岡山大学）	葛西真記子（教授・鳴門教育大学）		
越 良子（准教授・上越教育大学）	廣瀬 政雄（教授・鳴門教育大学）		
富永 良喜（教授・兵庫教育大学）	前田 英雄（教授・鳴門教育大学）		
プロジェクト全体の研究経過及び研究成果			
<p>・3年間における研究活動（研究会開催、調査活動、研究成果の公表等）の概況や個々の分担研究の特筆すべき事項等について、簡潔に箇条書きでお書きください。</p> <p>近年、児童・生徒の健康と適応上の問題の発生率は、上昇の一途あるいは高止まりの傾向にある。この問題の抜本的な対策は、予防にある。とりわけ、すべての子どもが健康、適応上の問題をもつ可能性があると考え、問題を持たないうちに、すべての子どもを対象にして学校で実施するユニバーサル予防教育の重要性が強調される。</p> <p>このユニバーサル予防を学校において実施することは世界の学校教育の最近の強い傾向であるが、その試みはまだ不十分な状況である。しかし、その広まりの勢いはすさまじく、現段階でも、多様な教育目標、理論、そして方法があり、その多様性にふれながら今後の発展の方向と可能性を検討することが急務になっている。</p> <p>この教育が遠い先に目指していることは、子どもの健康や適応を守る学校での予防教育が、すべての学校において恒常的に実施されることであろう。このことは、世界のどこの国においても実現されていない。見果てぬ夢のような目標である。しかし世界では、夥しい数の予防教育プログラムが開発されている。また、限定的、短期的であっても、学校教育に適用されてもいる。</p> <p>そこで、本プロジェクトは、まず、この学校予防教育の発展の方向を探究するため、日本ならびに海外諸国での予防教育の現状と課題を文献ならびに実地調査、さらにはアンケート調査を実施し、日本と海外での予防教育の特徴と内容を把握することを試みた。その後、国際会議や国内外の学会でのシンポジウムを経て、日本と海外の予防教育を比較しながら、それぞれの独自性と共通性を探究し、そこから今後の世界の学校予防教育のあり方、発展の方向を検討した。</p> <p>このような目的から、メンバーは海外研究者との交流を密にし、国内外の予防教育を精査した。またその間、日本国内でメンバーが進める予防教育関連の基礎ならびに応用研究を充実させ、国内の予防教育の発展と海外への発信の基盤を構築し続けた。</p> <p>下記には、この3年間にわたる研究活動を、大きく、海外視察ならびに情報交換、国際カンファレンスの開催、海外の学会でのシンポジウム開催、日本の学会でのシンポジウム・ワークショップ開催、国内での予防教育に関する調査研究に大別して記載する。</p> <p>1. 海外視察ならびに情報交換（以下、時系列にそって記述）</p> <p>（1）オーストラリア・クイーンズランド（平成22年5月22日～6月1日） まず、オーストラリア・クイーンズランドの予防教育の特徴と現状の視察を行った。具体的には、ブリスベンにおける私立小・中学校、公立中学校、クイーンズランド州教育省を訪れ、さらには、予防教育の研究者との情報交換のため、クイーンズランド大学医学部、クイーンズランド工科大学大学院心理学部を訪れた。また、社会・感情学習（SEL: Social and Emotional Learning）の普及のための3つの講演会にも参加し、オーストラリアにおける社会・感情学習の普及状況を目の当たりにすることができた。</p> <p>（2）アメリカ・デンバー（平成22年10月13日～16日） アメリカ・デンバーの安全な学校とコミュニティのためのセンター（Center for Safe Schools and Communities）を訪問し、センター・ディレクターのSara Salmon博士と会議をもった。そこでは、予防教育に関して情報交換と討議を重ねた。その後博士とともに、デンバー内の矯正施設や公立学校を複数校訪問し、博士が進める予防教育を実際に視察し、そこでの教職員のみなさんと情報交換ならびに討議を行うことができた。</p>			

(3) アメリカ・シカゴ（平成22年10月18日、19日）

アメリカ・シカゴでは、まず、ノース・ウェスタン大学のBarton Hirsh教授の研究室を訪れ、大学院生とともに、互いの予防教育についてプレゼンし、今後の世界の予防教育の発展について討議を行った。そして翌日には、イリノイ大学シカゴ校にて、社会・感情学習の中心的センターといえるキャセル（CASEL: Collaborative for Academic, Social, and Emotional Learning）のプレジデントであるRoger Weissberg教授の研究室を訪問し、先方から10名ほどの出席者をむかえて、相互の予防教育のプレゼンから始まり、今後の予防教育としての社会・感情学習の発展について討議を行った。その後同日中にキャセルを訪問し、そこで働く4名の研究者にキャセルの活動状況を伺い、社会・感情学習を含めて世界の予防教育の動向と今後の発展について討議を行った。

(4) オーストラリア・アデレード（平成22年10月29日～11月6日）

オーストラリア・アデレードにて、複数の学校におけるいじめ対策等を見学し、資料を収集した。また、いじめ予防を中心とする予防教育の研究者との情報交換のため、フリンダース大学の研究者らと交流した。その交流では、予防教育に関して、相互のプレゼンテーションを通じて意見交換を十分に行った。

(5) 中国・重慶（平成23年2月23日～2月28日）

重慶第二外国語学院を訪問し、中高生の心の健康に関する課題及び心の健康教育の取り組みを教師8名と意見交換した。また、重慶大学の学生とその担当教員、そして心理学教員約100名へ、日本の心の健康教育に関する情報を提供し、学生のメンタルヘルス、特に自殺問題への予防教育について意見交換した。

続いて、西南大学心理学院にて、大学院生、大学教員、学校教師約300名と、災害後の心理健康教育のあり方について、加えて、日中の文化の共通性と相違性に関して意見交換した。さらに、西南大学心理学院において、事件後の心のケアのあり方、そして、予防教育、日本で開発されたトラウマ回復プログラム、災害後の防災教育、心のケアについて意見交換した。

(6) イギリス・ロンドン（平成23年6月28日）

イギリス、ロンドン大学ゴールドスミス校を訪れ、Peter Smith教授の研究室と今後の世界の予防教育について情報交換と討議を行った。Smith教授は、いじめの研究では世界的に著名な研究者である。こちらのグループから、日本で進めている代表的な予防教育についてプレゼンを行い、先方からも教授をはじめ4名の教員や大学院生がいじめ、レジリエンス、ピア・サポートなどのテーマについて国際比較研究のプレゼンを行った。その後、今後の予防教育について、世界的視野で現在の問題をとらえながらそのあり方を討議した。

(7) フィンランド、Turku及びEspoo市（平成23年8月29日～9月7日）

フィンランドにおいてTurku市及びEspoo市で小学校2校を訪問し、学校・授業見学と先生方との話し合いを通して、いじめ対策のKiVaプログラムの実践状況を詳細に知ることができた。Turku市では、Puolala Schoolの1年生のSirpa Isolauri教諭のクラスで授業見学等を行った。その際にルーマニア警察からも見学者があり、意見交換することができた。また、少し前に同校を訪問した日本人の私立中学校教員（1年間の長期滞在中）を紹介いただき、その方からフィンランドの学校について詳しく聞くこともできた。Espoo市では、Karamzinin Schoolを訪問し、KiVaプログラムの全校での運用状況を校長らから聞き取った。ちょうど、スウェーデンからの見学団体がおり、一緒に話を聞くことができた。さらには、フィンランドの政府機関の方との面会や幼稚園の見学も行い、多方面から情報を得ることができた。

(8) 中国・四川省（平成23年12月23日～26日）

中国、四川省の四川師範大学にて、教育学院長・遊永恒教授から中国での心理健康教育について説明を受け、そのあり方について討議した。また、教授と大学院生、現職教師など約50名に日本の心理健康教育の現状を説明した。翌日には、同大学の張告教授より高校3年生への過酷な受験ストレスへの対処法について聴取した。その後、四川師範大学附属実験小学校にて副校長と心理健康教育師・李宇氏から、小学5、6年生への心理健康教育の授業の頻度・内容について、また道徳と心理健康教育の相違について、さらには、効果研究の現状、実施者の専門性、心理健康教育と教育相談の関連について聴取した。

## 2. 国際カンファレンス

(1) 国際専門家会議 平成22年9月25日(土) 12:30～18:30

場所: キャンパス・イノベーションセンター(CIC) 3階 多目的スペース(大阪市北区中之島)  
招聘講演者

・ Dr. Yongheng You

(Dean, College of Teacher Education, Sichuan Normal University, China)

講演タイトル "School mental health education in china"

・ Dr. Kris Ojala

(Co-Director, Pathways Health and Research Centre, Australia)

講演タイトル “Preventive CBT based interventions for children”

・ Dr. Melissa DeRosier

(Director, 3-C Institute for Social Development, USA)

講演タイトル “Implementing effective social-emotional interventions in schools”

・ Dr. Paul Naylor

(F/T Senior Research Fellow, Institute for Health Services Effectiveness, Aston University)

講演タイトル “Bullying, anti-bullying peer support systems, and mental health”

日本からは、40名ほどの予防教育の専門家が集まり、招聘者が行う予防教育についてプレゼンが行われた後、世界の予防教育について、目下の課題と今後の展望、発展を討議した。討議は十分に時間がとられ、あらかじめ設定された世界の学校予防教育の課題に関する討議から自由討議へと展開された。会議は、すべて英語（通訳なし）で運営され、言語の壁にとらわれることなく、意義深い情報交換ならびに討議がなされた。

(2) 国際専門家会議 平成22年11月28日(日) 12:30~18:30

場所: キャンパス・イノベーションセンター(CIC) 4階 多目的スペース(大阪市北区中之島)

招聘研究者

・ Dr. Sara Salmon

(Executive Director, Center for Safe School and Communities, USA)

講演タイトル “An evidence-based social intelligence curriculum is necessary for academic and behavioral success”

・ Dr. Michael Bernard

(Professor, The University of Melbourne, Australia)

講演タイトル “Social and emotional learning: best practices in school-wide implementation”

・ Dr. Thomas Lickona

(Professor, New York State University at Cortland; Director, Center for 4th and 5th R's, USA)

講演タイトル “Helping students become both smart and good: Strategies that work in classrooms and schools”

日本からは、50名ほどの予防教育の専門家が集まり、招聘者が行う予防教育についてプレゼンが行われたあと、2時間以上の総合討議時間を設けた。前回の会議を受け、その後の新たな問題と課題を中心に討議テーマを設定した。その後、自由討議の時間を設けた。今回の会議では、今後の世界の学校予防教育の発展方向についてさらに多くの示唆が得られた。

(3) 国際専門家会議 平成24年10月6日(土) 9:30~18:00

場所: 大阪大学中之島センター(CIC) 4階 多目的スペース(大阪市北区中之島)

招聘研究者

・ Dr. Roger Weissberg

(University of Illinois at Chicago and CASEL, USA)

講演タイトル “Strategies to enhance the social, emotional, and academic learning of all students”

・ Dr. Christina Salmivalli

(University of Turku, Finland)

講演タイトル “Evidence-based prevention of bullying: Experiences from the national KiVa program in Finland”

・ Dr. Celene Domitrovich

(Collaborative for Academic, Social, and Emotional Learning, CASEL and Pennsylvania State University, USA)

講演タイトル “Social-emotional learning in children and adolescence: Scientific evidence and practical implications”

日本からは、50名ほどの予防教育の専門家が集まり、招聘者が行う予防教育についてプレゼンが行われたあと、2時間以上の総合討議時間を設けた。今回は本プロジェクトのまとめにもなる国際会議であったので、今後の世界の学校予防教育のあり方と展開をまとめた。予防教育では中心的役割を果たすキャセルからの招聘、また、いじめ予防では世界をリードするKiVaプログラムの開発者の参加ということで、最後を締めくくるにふさわしい、顔ぶれと討議内容であった。

### 3. 海外シンポジウム主催開催

(1) アメリカ心理学会でのシンポジウム(平成22年8月14日)

アメリカ・サンディエゴで開催されたアメリカ心理学会（APA）で、シンポジウム「Preventive education in Japan: What we incorporated or changed」（日本における予防教育：何を取り入れ、何が変わったのか）を企画し、プロジェクトにかかわる3名が話題提供を行った。セッションでは活発な議論が行われ、セッション終了後にも引き続き多くの質問が寄せられ、今後の教育の世界的な展開の展望が得られた。

#### （2）子どもの社会・感情能力ヨーロッパネットワーク会議（平成23年6月30日）

英国マンチェスターで開催された子どもの社会・感情能力ヨーロッパネットワーク会議（European Network for Social and Emotional Competence in Children: ENSEC）において、「Innovative preventive education for health and adjustment」（健康と適応のための革新的な予防教育）と題したシンポジウムを企画・開催し、本プロジェクトにかかわる3名が各自の予防教育について発表し、Paul Naylor博士（イギリス・アストン大学）の指定討論を経て、予防教育の課題と発展について討議を行った。

### 4. 国内シンポジウム、ワークショップ開催

#### （1）日本教育心理学会 自主シンポジウム開催 早稲田大学（平成22年8月27日）

タイトル「日本になじむ予防教育の導入 ー学校のホンネー」

研究者と学校教員がペアになり話題提供を行い、日本で実施されている学校予防教育の課題、そして学校側からの要望について話題提供と討議を行った。

#### （2）日本心理学会 ワークショップ開催 大阪大学（平成22年9月22日）

タイトル「心理的健康教育・予防教育実施における学校のアセスメント」

健康教育や予防教育を実施した場合の学校での評価について現状と課題が話題提供され、問題点を列挙しながら、今後の発展を討議した。

#### （3）日本心理学会 ワークショップ主催 日本大学（平成23年9月16日）

タイトル「新しい学校予防教育 ー健康・適応から学業までー」

広く健康と適応を守り、学業面にまで好影響を及ぼす予防教育について話題提供がなされ、課題と発展について討議された。

#### （4）発達心理学会 自主シンポジウム主催 名古屋国際会議場（平成24年3月11日）

タイトル「学校予防教育の革新 ー健康と適応を守るユニバーサル予防の広域・恒常的適応ー」

日本の学校予防教育の中、普及がめざましい教育に焦点を当て、その紹介を話題提供として行い、課題と発展について討議した。

#### （5）日本教育心理学会 自主シンポジウム開催 琉球大学（平成24年11月25日）

タイトル「世界の学校予防教育」

このプロジェクトの最終報告の一つを兼ねたシンポジウムを開催した。アメリカ、オーストラリア、ヨーロッパ諸国の予防教育が紹介され、今後の世界の学校予防教育について情報交換と討議がなされた。

### 5. 日本国内での予防教育に関する調査研究

今日、日本の学校現場では様々な予防教育が導入され実施されている。しかしながら、どのような予防教育がどの程度行われているのか、その実態は明らかとはいえない。学校では子どもたちにどのような問題を感じ、何を予防しようとして、どのような予防教育を実施しているのか。また、予防教育の必要性を感じながらも必ずしも実施していないとしたら、それは何故なのか。これらの現状についての質問紙調査を実施した。調査は、予防教育実施の全国的傾向の把握を目的とした、全国の教育センターでの教員研修において予防教育が取り上げられている実態に関する<調査1>と、現場教師を対象とした、予防教育の実施程度と予防教育に対する教師の認識に関する<調査2>からなる。その結果、教育センターや教師が認識している子どもたちのニーズ（不足していると考えられている能力・特性）に対して直接アプローチしうる予防教育が、必ずしも実施されていない可能性と、より積極的な予防教育の実施を教師に躊躇させる要因が示唆された。

その他、メンバー（研究員含む）は、大阪サテライトでの会議、メールやスカイプを利用して互いの活動情報交換や方向づけを頻繁に行ってきた。特に、最終年度においては、書籍として成果をまとめるにあたり、頻度高く接触することとなった。

また、メンバーは、各自の予防教育にかかわる基礎・応用研究を深め、書籍や論文でその情報を発信し続けた。さらに、海外の研究者と共著で書籍や論文を公表し、そのなかで自然と相互の交流と討議がなされ、互いの理解が深まり、今後の世界の予防教育の展開についての討議がスムーズに行われる下地となった。

上記のように、国内外で予防教育の情報収集ならびに研究者との討議を重ねてきた。その結果、海外ならびにの予防教育の現状と課題が明らかになった。さらには、このプロジェクトでは、今後の世界の学校予防教育の発展の方向を日本や諸外国の比較により示唆することができた。

重要な結論としては、次の諸点が指摘された。

- ・学校予防教育は、学校において継続して常時実施する必要がある。
- ・予防の中でも、すべての子どもを対象にしたユニバーサル予防の実施が特に求められる。
- ・共通点も多いが、日本の教育事情の特異性から海外で実施されている予防教育はそのまま日本で実施できない。教育カリキュラムの可塑性、予防教育の対象として特定の子どもの選別の可能性など、各国の事情を考慮した予防教育の開発と実施が重要である。
- ・予防教育の恒常的実施のためには、日本の学習指導要領など公的な教育課程に参入する必要がある。
- ・予防教育の実施者のために円滑な研修システムを構築する。
- ・大規模な効果評価研究を遂行すること、などである。

6. 国内外のA論文誌に公表された成果（ほか、B論文、図書、学会発表多数； チーム構成員分のみ、研究員分省略）

● A雑誌論文において、予防教育を実施し効果を調べたもの（日本の予防教育の発展と発信に寄与した）

富永良喜・三浦光子・山本奨・大谷哲弘・高橋哲・小澤康司・白川美也子・渡部友晴（2012）. 大規模災害後の子どものこころのサポート授業 日本トラウマティック・ストレス学会誌、10, 11-16.

葛西真記子・岡崎陽子（2011）. LGB Sensitiveカウンセラー養成プログラムの実践－臨床心理士養成指定大学院での試み－ 心理臨床学研究、29, 257-268.

岡崎由美子・安藤美華代（2011）. 児童の学校ストレスに対する心の健康教育－養護教諭による授業の試み－ 学校保健研究、53, 437-445.

Yamasaki, K., Uchida, K., & Katsuma, L. (2010). Re-examination of the effects of the “finding positive meaning” coping strategy on positive affect and health. *Psychologia*, 53, 1-13.

● A雑誌論文において、予防教育の開発のために基礎研究として発表されたもの（予防教育の開発に寄与した）

貴志知恵子・内田香奈子・山崎勝之（2012）. 正感情と認知的再解釈コーピングの関連について－高校生における抑うつ予防プログラム構築のための基礎研究－ 小児保健研究、71, 259-266.

澁江裕子・葛西真記子（2012）. 心的外傷体験をもつ女児の教育場面におけるレジリエンスとアタッチメントの検討－書籍の会話分析を通して－ 教育実践学論集、13, 75-90.

Yamasaki, K., Sasaki, M., Uchida, K., & Katsuma, L. (2011). Effects of positive and negative affect and emotional suppression on short-term life satisfaction. *Psychology, Health, & Medicine*, 16, 313-322.

三浦浩美・山崎勝之（2012）. 児童期の健康・適応に及ぼす正負感情易感性和感情表出性の影響 学校保健研究、54, 404-411.

三浦浩美・勝間理沙・山崎勝之（2011）. 児童期における感情表出尺度日本語版の開発 小児保健研究、70, 646-651.

内田香奈子・貴志知恵子・山崎勝之（2011）. 高校生の感情表出によるストレス・コーピングが抑うつに及ぼす影響 学校保健研究、53, 127-134.

貴志知恵子・内田香奈子・山崎勝之（2010）. 正感情・負感情と認知的再解釈コーピングが抑うつに及ぼす影響について－高校生を対象とした予測的研究－ 学校保健研究、52, 390-397.

この3年間のプロジェクトの成果は、平成25年3月に金子書房より「世界の学校予防教育」として刊行し、その詳細を広く伝えているので参照されたい。

(注) 氏名欄は適宜増減してください。

\* 字数の制限はありません。記述欄が不足する場合は、複数枚になっても構いませんので適宜行数を増やしてください。